

2016年度
海外研修・研究等 助成事業 研修報告

小中学校連携のための 授業改善について

～イエナプラン教育の視点から～

静岡市立井川小中学校 教諭 村松 優子



朝のクラスミーティングの様子



異年齢グループでの活動の様子

イエナプラン教育について

1923年にドイツのイエナ大学の教育学教授ペーター・ペーターセンが大学にて実験教育として始めたものである。異年齢集団の中で互いの違いを認めて助け合い、教員だけに依存しない主体的な学びを展開する。オランダでは、1960年代から導入され、現在では200校を超えるイエナプラン校が存在する。イエナプラン教育の考え方は、子どもが自分らしく生活することや、ありのままにいられることを保障し、子どもが自分の能力を生かして成長できるようにすることを基盤としている。(イエナプラン20の原則) 子どもは、どんなに小さくても科学者である。疑問を持ち、試行錯誤を繰り返し、追究していく力を持っている。自分たちで学ぼうとする子どものこのパワーを使うことを前提として、教師が授業をコーディネートするのである。

小中連携のための授業改善について

小学校、中学校という枠組みを超えて、子どもにとって意味のある学びを連続的に行っていくことで、その学びは社会に出たときに「生きる力」として根付いているはずである。「主体的な学び」は生涯の学びへと通じるものである。小学校で培った力が中学校で発揮でき、中学校で学んだプロセスが更に深化され専門的な知識を獲得しながら新しいものを創造していく力になる。子どもの学びの連続性を保障するためにも、小中連携は欠かせない。中学生の学びを広げる姿を小学生があこがれをもって見る。自分もいつかあなりたいという思いをもって学びを進める。中学生は小学生のパワーと好奇心に後押しされ、自分の学びを更に深めようとする。相互効果が期待できる。

小学校でも中学校でも授業を考える際、「教える」のではなく、子どもの成長を促すために、子どもの思いを大切に、子どもがわくわくするような問いかけを続けたい。子どもが課題に対して興味をもって追究するためには、どのような仕掛けをすれば良いのか。自分に合った能力を子ども自身が自覚し、友だちや周りの人と協働しながら一緒に成長していけるように環境を整えていきたい。これはまさに、アクティブ・ラーニングの視点で授業改善を進めている今の研修に合致しているのではないかと思う。そして、一連の学びを振り返る中で自分の成長を実感させていくことで、自己肯定感を高め、次の課題への意欲につなげていくことができる。

自らの課題を自立的に遂行し、自分とは異なる他者とともに、話、協働し、遊び、共感しながら未来の責任ある市民を育成するイエナプラン教育の実践する「主体的な学び」にならない、子ども自身が課題に気づいたり課題を設定したりすることや、教師が課題を設定する場合にも子どもに切実感や必要感のある課題を提示するようにする。このような授業実践を積み重ねることで、小中連携をより良いものにしていきたい。